大岡信
しおり草
世界文化社

大岡信

しおり草

世界文化社

しおり草（ぐさ）

一九九八年二月一日　初版第一刷発行

著　者　大岡　信
発行者　小林弘明
発　行　株式会社世界文化社
〒一〇二-八一九六　東京都千代田区九段北四―二―二九
電話　〇三(三二六二)五一一八(編集部)
〇三(三二六二)五一一五(販売部)
印　刷　中央精版印刷株式会社
製　本　中央精版印刷株式会社
©Makoto Ōoka 1998 Printed in Japan
ISBN4-418-98503-4
禁無断転載・複写
定価はカバーに表示してあります

しおり草

目次

〈口絵〉私のタカラモノ

I

日本文化の特色……10
雪月花　特に花……35
和歌と日本人の美意識——対談者・丸谷才一……57

II

曖昧(あいまい)さの美学——戦後詩試論……86
短歌・俳句の発見……110
短詩型の明日……136
イメージの追求……139

III

昭和の名句百選……148

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

IV

昭和短歌『折々のうた』百首選……194

V

青春の本　その一……244
青春の本　その二……249
文庫ばなし……251
風巻景次郎著『中世の文学伝統』……260
私の好きな文章――橘南谿（たちばななんけい）著『東西遊記』……263
橘　南谿著『東西遊記』を読む……267
橘　南谿著『東西遊記』と私……271
今泉みね述『名ごりの夢』雑感……275
諏訪春雄・日野龍夫編『江戸文学と中国』……279
本の旅……282
梅原　猛著『隠された十字架――法隆寺論』……282

井上　靖著『後白河院』　284
丸谷才一著『後鳥羽院』　285
小西甚一著『宗祇』　287
唐木順三著『無常』　289
安東次男著『与謝蕪村』　291
保田与重郎著『日本の橋』　294
『ファン・ゴッホ書簡全集』ほか　297
中原中也著『山羊の歌』　303
武満　徹著『音、沈黙と測りあえるほどに』　305
小林秀雄著『芸術随想』……307
ドナルド・キーン著『日本文学の歴史』……310

〈付〉

恋の百人一首　316
子規の秀句20　323
芭蕉に関する文庫三冊　324

好きなファンタジー・ノベル三篇　326
『ちくま学芸文庫』に収録したい本　326
愛用の辞書　326
好きな国宝『伴大納言絵詞』　327
私の楷書名筆ベスト3　327
日本の百宝　328
あとがき……331

カバー・表＝上村松篁〈竹雪〉部分
カバー・裏＝『貫之集下』断簡（石山切）
見返し＝上村松篁〈芦〉部分
扉＝奥村土牛〈羅睺羅立像〉
題字＝篠原榮太
撮影＝斎藤幹朗（小社写真部）
装幀・ＡＤ＝長谷川徹

写真協力＝藤森　武
ウロコヤ横井商店
フジ美術企画

しおり草

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

I

日本文化の特色

生活の芸術化

日本の文学や芸術の特色はどんなところにあるのか、考えてみましょう。昔のことばかり探るよりも、現在のことを言えば分かっていただけると思います。皆さんのなかにも、短歌や俳句をなさる方、生け花や茶道をなさる方は多いと思います。香道をたしなむ方もいらっしゃるかもしれません。さらにはスポーツと言ってしまうと違ってきますが、柔道や剣道などの武術までを含めて考えてくださっても結構です。それらは、たとえば武術で言うと、常にその根底には、身を守るためのものであって攻撃するためのものではない、という考え方があります。そういうある種の根本的な原理があって、それが、「暮らし」と密接に結びついた長い時間のなかで洗練され、現在まで引き継がれてきているというのが、日本の文学や芸術における一番の大きな特色であると思います。

伝統が継承されてゆく文化、というわけです。その場合、日本での大きな特徴は、大勢の人が集まって流派なり結社なりをつくるという点です。たとえば、短歌や俳句の結社は当たり前のことです。私は私の短歌が好きだから、あるいは私は天才だから一人でやる、という人もいるかもしれま

せんが、大半は結社に所属して活動していくのです。しかも、一人でやっている人の短歌や俳句と、結社でぎりぎりと絞られている人のものとを比べてみると、十年経てば、結果は明白です。もちろん結社のなかでもダメな先生や仲間に教わると本当にまずいことになってしまいますが（笑）、良い先生、良い仲間がいるところで鍛えられた人は、十年経てば、見違えるほどすごくなるものです。背骨のしっかりとしたもの、二枚腰三枚腰の力強さのあるもの、木にたとえれば枝葉の隅々にまで樹液がいきわたっているようなもの、そういう作品がつくれるかどうかは、やはり結社の役割が大きいと言えるでしょう。結社は、非常に大切な鍛練の手段と言えます。私には、直接、結社に関係して短歌や俳句をつくった経験はありませんが、父親が歌人だったので、まだほんの小さな子どもの頃から、毎月の歌会に出て眺めていた経験がございます。そこで、歌会での皆の発言を聞いていると、子どもながらに分かるのです。この人は良くなるだろう、と。事実、そう思ってみていると、やはり十年も経つと素質が磨かれてきて、非常に立派な歌人になる……。そういう人は、分からないことを分かったふりをしない、分かっていることに安住しない。分かっていることを踏まえて、分からないことに常に取りかかっていく、そういう気持ちのある人です。

いずれにしても、日本人の生活文化のなかに、そうした種類の芸術・文化形式がとても多いと言えます。剣道や柔道もそうした形式の一つと考えて良いでしょう。伝統のある芸術なり文化なりを、複数の人たちが集い合い、グループをつくることで育てていくわけです。

けれども、現代において、そうした伝統文化のあり方や日本人と伝統とのつながりを考えるとき、問題がないわけではありません。この度私は、フィンランドの田舎の避暑地で行なわれた世界の作家が集まる会議に出席して「連詩」をつくってきました。パーティの席で、ある美しい女性が、

「私は剣道をしている」

と言いました。日本の女性と比べても小さく見える女性なのでびっくりしていると、彼女は腕まくりをして、私よりもはるかに高い盛り上がり方をする力こぶを見せてくれました。しかしその女性のふだんはとても淑(しと)やかで、同時にあけっぴろげな面もあり、実に楽しい人物でした。職業は英語教師。その一方で剣道を長くやっていて、その前は柔道を習っていたらしい。彼女のように、フィンランドでは、単なる護身術としてではなく、日本の文化を知るために剣道や柔道を習っている人が多いのです。ある意味で、私は、日本人が柔道や剣道の国際試合で外国人にぽんぽん負けるのは祝福すべきことだと思っているのです。それは、外国の人の方が日本人よりもずっと真剣にやっていることを知っているからで、そんなふうに反日本的な発想が時々私のなかにおこってきます。日本の柔道の選手たちも真剣なのでしょうが、どこかに甘えが感じられます。日本人だから、本家だから絶対勝つ、そんな思い上がりや、周囲の「勝って当然」といった声に背中を押されて、思わず体が硬くなって投げ飛ばされてしまう日本の選手が多いものです。それに対して、外国の選手は、自分自身を磨くために武道を行なっているのです。これは大きな違いです。

いずれにせよ、日本の伝統のなかで鍛えられてきたものが、現在の世界のいろいろな場面で生きて行なわれているという事実は、日本人自身にとって大きな問題をはらんでいると思います。考えねばならないことが実はたくさんあるのだという意味で。

また、特色の具体例として挙げると、日常的に口にしているお菓子や料理にしても、日本料理は、食べ物のあしらい方という点でたいへん優れていると思います。味つけに関しては民族によって好き好きがありますが、外国の人はだれでも、日本料理を前にして、皿の上の品物の並べ方が実にき

れいに見えるように工夫されていることに驚きます。この頃は日本人の経済的な進出のおかげで、お店も増え、外国の日本料理店で日本料理に親しむ人もだんだん多くなってきて、値段も以前ほどべらぼうではなくなってきましたが、外国の人たちが高い値段を取られても日本料理店に通うのにはそれなりの理由があります。一つはダイエットに良いという不思議な観念が生じていること、もう一つは見ただけで気分が良いということ。自分たちの家庭料理には見られない食べ物のあしらい方がされているので、新鮮な印象を受けるのでしょう。そして、一番大切なこととして、日本の料理やお菓子の場合、非常に季節感が重んじられている点です。私のヨーロッパやアメリカ、中国での経験則から言うと、フランス料理は比較的季節感を重んじる料理の仕方をしますが、それ以外の国では、料理は実においしいのですが、いつの季節でも味は変わらないだろうなと思ってしまう料理が多いものです。

もっとも、北欧など、四季のないところで季節の繊細な感覚を求めるのは無理な話ですが、日本人は四季の感覚を非常に重んじていて、お菓子でさえも、その感覚は決定的に大事なものです。季節の感覚は鼻の感覚と非常に関係が深く、日本の伝統的な料理に始まって、華道や香道にいたるまで深い関わりをもっています。香を聞く、と言いますが、想像ですが、その場合、季節の感覚はものすごく大事なのだろうと思います。お茶会にいたっては明らかにそうです。単にこの季節にはこの掛け軸や花を飾り、この懐石を出す、といった決まりだけを行なっているのではなくて、この季節にこれを出すのはなぜかということを身体感覚的に知っていて行なっているところが特徴でしょう。つまり、そういう感覚が、日常的な生活のなかにまで深く染み込んでいて、日本人の芸術的な感覚の基本になっているのだと思います。

日本料理ばかりではありません。先ほどふれた、短歌や俳句のようなものも、生活のなかに混じり合っている要素をたくさん含んでいます。短歌をつくる際、自分の部屋、つまり密室に閉じこもって短歌を詠む人は、むしろ少ないのではないでしょうか。割と気楽に、たとえばどこかを旅しながら、車や新幹線や飛行機に乗ったときにひょっと見たものから発想して、そこから一首の歌が、あるいは十首、百首の歌ができるケースも多いように思われます。とても簡単な言い方ですが、そういうところが今日まで厖大な短歌人口を養なってきている理由だと思うのです。

しかし、日本文化には、暮らしと密接な、季節の移り行きと深く結びついているがゆえのむずかしさもあるのです。「だれでもやれるけれど、やりがたい」一面がある、と言ってもいいでしょう。俳句だって、そうです。手軽にできそうですが、最高のレベルのところへたどりつくまでには、五十年かかってもいけないかもしれません。現代の最高の俳人はだれかと考えてみると、もちろん人によって意見は違うでしょうが、やはり八十歳を過ぎた人たちではないでしょうか。たとえば、東京にいらっしゃる加藤楸邨、関西にいらっしゃる阿波野青畝や山口誓子など、そういう方々が頑張っていらっしゃるから、俳句というのはすごいものなのです。楸邨の俳句は、私がふだん読み慣れている現代詩に比べると、たいへん重みがあります。五七五にすぎないのに、なぜこの人はこんなふうにできるのだろう、同じ五七五なのにほかの人たちとどうしてこんなに違うのだろう、といつも思います。つまり、習熟するのには、それなりの手間暇が必要で、加藤さんの場合も、若いときから五七五の俳句形式と血みどろになって闘ってきたことが、現在のすご味や、同時に、おかしくてたまらないユーモラスな句風と結びついているのだと思います。柔らかく、ちょっと微光を帯びたような、そういう空間が現れてくるのは、やはり毎日の、たいへんな努力なり見識からなのだ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com